学習者のストーリーに見る英語学習への動機づけ：
エンゲージメントに繋がる経験

鈴　木　　栄

はじめに

第二言語習得における学習者の「動機づけ」（motivation）についての研究は、1950 年代後半にカナダの社会心理学者たちによって始められた。その後、学習者が持つ考えや学習観（学習者ビリーフ learners' beliefs）および感情（emotion）が第二言語学習に対する動機づけに影響を与えるとして多くの研究がおこなわれてきた。第二言語習得研究には、心理学の知見が必要である（Dörnyei, 2010）。第二言語としての外国語を教える教育者は、文法（grammar）や、学習方略（learning strategies）などの知識を伝授するが、外国語学習では学習者に心理的負荷がかかることが多く、教室という世界で、教師と学習者の人間的な交流が必要であり、教える側は、学ぶ側の気持ち、感情を理解することが重要である。

2022 年 6 月に開催された PLL4（Psychology of Language Learning 4）カンファレンスで、Graz 大学の Sarah Mercer 教授が、近年出版された本 *Engaging Language Learners in Contemporary Classroom*（Mercer & Dörnyei, 2020）に言及し、その中で展開されている新しい動機づけの概念について発表をした。エンゲージメント（engagement）である。聴いている方は、動機づけもエンゲージメントも同じではないかと感じた。Mercer 教授自身も、「ワインの異なる種類のことかもしれないが」と自己防衛のようにも聞こえる発言をした。その後、著書を読み、言葉の違いについて理解をし、エンゲージメントは、動機づけの新しい概念であると納得する部分があった。

日々学生と向き合う中で、学生の学習への動機づけを高めるにはどうすればよいのか、動機づけに繋がる学習活動はどのようなものがあるのか、考えることが多い。国際英語学科の学生は、英語学習への動機づけは高いが、他学科・他専攻には英語学習への動機づけが低い学生もいる。以前教鞭を取っていた理系の大学の学生は、英語に対する苦手意識を、石に潰されそうになっている学習者として描いた。

日本では、英語学習は、小学校から始まり、大学入学後も「必修」の括りの中で長期間続く。その過程で、当然、英語嫌いになる学習者も出て来る。そこで、負の動機づけ（demotivation）の研究が登場する（Kikuchi, 2013）。何が英語嫌いを生んだのか、教師が原因なのか、授業の難易度か、あるいは、授業内容か、学習環境か、動機づけを下げる原因を探ることも必要であろう。逆に、英語学習の成功者を研究してはどうか、という意見もある。博士課程に在籍していた時に、研究課題についての話し合いの中で、動機づけを専門とする指導教官が、「demotivation の研究は、研究している方が暗い気持ちになり、研究への動機づけが下がってしまうようだ」と語り、なるほどと思ったことがある。英語が嫌いになる要因を探るより、好きになる要因を探る方が研究する側も心の平和を保てるであろう。

そこで、本稿では、英語学習に対して前向きな気持ちを持ち大学に入学してきたと想定される国際英語学科の学生を対象に、英語に対する前向きな姿勢がどのように構築されてきたのか、エンゲージメントという括りで調べることにした。学習者の声を聴くことで、学生たちのエンゲージメントへの道のりを探る試行的な調査とする。

1. 第二言語習得における動機づけ研究概観

これまでに行われてきた動機づけ研究の流れを、以下に示す。

表 1　動機づけ研究の流れ

第 1 期 1950 年～	社会心理学の 影響	〈カナダの Gardner などの社会教育モデル〉 統合的動機づけ（目標言語の文化・社会の一員になりたいという気持ちから生まれる学習動機） 道具的動機づけ（報償・成果を目標とする学習動機）
第 2 期 1990 年～	認知・状況	〈教育心理学的アプローチ（自己決定論・帰属理論）〉 内発的動機づけ（言語そのものや言語を囲む文化などへの興味から生まれる動機づけ） 外発的動機づけ（結果・受験や試験などへの成功の動機づけ）
第 3 期 2000 年～	プロセス重視	〈Dörnyei & Otto によるプロセスモデル案〉 プロセスモデル（過程重視の学習モデルの動機づけ） 国際的志向性（異文化間接近・国際的職業や活動・海外の出来事や国際問題への関心による動機づけ）
第 4 期 2005 年～	ダイナミックな アプローチ	〈多様なアプローチによる動機づけ研究の台頭〉 L2 動機づけ自己システム論 複雑系理論（学習者の動機づけと環境の相互作用による学習者の変化や発達） 第二言語習得におけるポジティブ心理学（前向きな感情・共感・喜び・他者との関係性・ウェルビーイング） 学習者意欲減退要因（demotivation） 動機づけの潮流（強い動機づけの流れ） SLA におけるエンゲージメント研究

（西田、2022 を参考に筆者編集）

動機づけ研究の最新の動向では、社会教育的モデルを応用した研究として、「第二言語動機づけ自己システム」（L2 Motivational Self System）（Dörnyei, 2005）が発表されたが、これは、自己（self）に焦点を当てた新しい考え方である。Gardner（1985）の研究チームによる研究に始まるそれまでの動機づけ研究における、統合的志向性（integrative orientation）、あるいは、道具的志向性（instrumental orientation）だけでは、例えば、日本のように、英語を日常の生活の中で使う第二言語という括りではなく、外国語として学習している国の状況の動機づけ、あるいは、複雑な動機づけのしくみ

を説明するには充分でないことがわかってきた。

Dörnyei が提案した、第二言語の動機づけ自己システム（L2 Motivational Self System）は、3 つの要素で成り立つ。理想的な第二言語における自己（Ideal L2 Self），第二言語におけるあるべき自己（Ought-to L2 Self），第二言語体験（L2 Learning Experience）である。理想的な第二言語における自己（Ideal L2 Self）は、第二言語を使う理想的な自己像を持つことで、学習への動機づけになる、という見方である。　第二言語におけるあるべき自己・義務的な自己（Ought-to L2 Self）は、外的要因（親・教師の期待、出世、受験など）による自己変容への願望や、否定的な結果を生まないようにしなければいけないと考える、あるべき自己をもつことが学習への動機づけになる、という見方である。これは、過去の動機づけ研究における外発的な（extrinsic）動機づけに近い。第二言語体験（L2 Learning Experience）は、学習者は、学習環境や経験によって動機づけを持つ、という見方である（例としては、教師の影響、成功体験の影響、英語コースの楽しい内容、同級生の影響などがある）。

Dörnyei は、学習達成には、学習者の経験に基づく未来像が明確で、そこに向かう努力が必要であり、教員や学習経験の影響といった第二言語学習経験も、短期的な自己誘導に貢献する、としている。未来の自分の理想像に向けて、学習者が実現可能な自己像を経験から内発的・外発的に構築し、自己誘導することが第二言語動機づけのセルフ・システム（L2 Motivation Self System）である。

Dörnyei に先立ち、Markus & Nurius（1986）が示した、可能な自己（possible self）という考え方がある。これは心理学の研究であるが、彼等によると、可能な自己は、3 つの顕著な部分から成り立つ。つまり、期待される自己（expected self），自己への希望（hoped-for self），なりたくない自己への恐れ（feared self）である。このどれもが動機づけに影響を与えると考えられる。期待される自己（expected self）は、自分が実際、将来こうなるであろうという考える自己であり、自己への希望（hoped-for self）は、必ずしも

実現するとは限らないが、そうなりたいと考える自己、なりたくない自己への恐れ（feared self）は、そうなってほしくない自己への恐れ、である。この可能な自己（possible self）という見方は、動機づけ研究に大きな影響を与えた。MacIntyre, Mackinnon & Clement（2009）は、具体例を挙げている。「例えば、カナダでイマージョンとしてフランス語を学ぶ学生は、バイリンガルになりたいと思い、フランス語を流暢に話せることを願うと同時に、ケベックへの旅行でフランス語が話せないために迷子になってしまうことを恐れるだろう。」（筆者編集）。このケースでは、3 つの可能な自己（possible self）が交叉し合い、それが外国語を学ぶ理由、あるいは動機づけになっていると考えられる。

図 1：動機づけプロセスモデルの概要

＜選択の動機づけ＞

（動機づけの機能）	**（動機づけへの影響）**
・目標設定	・目標に対する意識（目標の関連性・特性）
・意図の形成	・学習に関係する価値、成果、結果
・実行	・第二言語およびその話者に対する態度
	・成功への期待・対処能力への認知
	・学習者信念（ビリーフ）・学習方略（ストラテジー）
	・環境的サポートあるいは妨害

↓

＜実行の動機づけ＞

（動機づけの機能）	・自律性の認知
・小課題の生成と実行	・教師・親の影響
・機能的評価・自己達成	・教室内での報酬（点数・ 褒めなど）
・行動規制	・ゴール設定（競争あるいは協同）
（動機づけへの影響）	・学習者グループの影響（教室内外）
・学習経験の質向上	・自己規制方略の知識と使用
（例：喜び・ニーズの重要性	（例：目標設定・学習・自己動機方略）
対処能力・社会的イメージ）	

↓

＜動機づけに関する振り返り＞

（動機づけの機能）	**（動機づけへの影響）**
・原因帰属の形成	・原因帰属の要因
・基準と方略の構築	・自己概念（自信や自己価値）
・意図や計画の中止	・フィードバック・報償・成績の獲得

（西田、2022 を参考に筆者編集）

Dörnyei & Otto（1998）に提案されたプロセスモデルには、図 1 に書かれているように 3 組の時間的な区分がある。どのように願い欲求することが行動の動機づけとなり、最終的な自己評価につながるかを示したものである。動機づけも変化をするため、こうしたモデルを参考に学習者に学習計画を作ることを促すこともできるであろう。

学習者のエンゲージメント（engagement）は、学習者の積極的な関与状態のことであり、学習者が、集中力と情熱をもち学習や学習活動に取り組むことである（Mercer & Dörnyei, 2020）。特に、第二言語を学ぶ場合には、積極的に授業内でおこなわれるタスクに取り組む、グループなどで協働的に学習を進める、授業外でも継続的に学習を進めることが重要である。そうした学習への積極的な態度に併せて、認知的・感情的関与という内的側面を持つ行動をエンゲージメントと捉える（Mercer & Dörnyei, 2020）。

2.　学習経験に焦点を当てた研究

第二言語習得研究および応用言語学の分野で自伝（autobiography）の研究が注目されたのは、第二言語教師教育分野における研究（Casanave & Schecter 1997）等で、個々の人生という文脈における経験の描写を社会現象として分析したことに由来する。そして、研究対象は、教師から学習者へと移行した。例として、Benson & Nunan（2004）による、「学習者のストーリー」（*Learners' Stories*）がある。この流れは、第二言語修得研究分野における、学習者に焦点をあてた研究の流れに（1970 年後半）沿ったものである。それまでの行動主義者（behaviorist）の理論では、インプットに対する学習者個々の反応を重要視していなかったが、学習者に焦点を当てた動きは、人間重視の考え方である。こうした、学習者に焦点をあてた教育・研究は広がりを見せてきた。第二言語学習は、「個人的な体験」である、という認識が強くなってきており、その認識の変化に伴い、研究自体も、量的研究から、質的研究へと注目が集まって来た。クラスに 40 人学習者がいれば、40 の学習者のストーリーがあり、40 の学習経験がある、ということである。

個々の学習者の学習経験をどのように調査するか、ということから様々な研究方法がおこなわれてきた。*Learners' Stories* に、動機づけのダイナミック・プロセスを研究する方法として、学習者に半構造的インタビューをおこなった研究（Shoaib & Dörnyei, 2004）が掲載されている。15 人の国籍が異なる学習者に 15 分から 20 分のインタビューをおこない、その結果をテンプレート（表）にまとめて動機づけがどのように変化するかを調査したものである。結果として、学習者の動機づけは変化するものであると結論づけた。そして、学習者の学習史（learning history）は第二言語学習における動機づけ研究に新しい光をあてるものであると結論づけた。

学習者のストーリーを収集する方法としては、インタビュー、日記、学習史などがある。いずれの方法で収集したデータも学習者のストーリーとしてまとめられている。

3. エンゲージメントについての試行的調査

ここからは、*Engaging Language Learners in Contemporary Classroom*（Mercer & Dörnyei, 2020）に記述されているエンゲージメントの概念をまとめ、個々の例を学習者のストーリーの中に探り、日本の英語学習者のエンゲージメントに繋がる経験ついて考察していく。

3.1. 調査方法

東京女子大学の国際英語学科の学生で、英語教育関係の授業履修者（1 年生と 2 年生）を対象に、学習者の英語学習史（My Language Learning History）を 800 字程度で書いてもらった（55 名）。記述する内容は、英語（学習）に対する考えの変化やそのきっかけとなった経験、学習への動機づけ（モチベーション）の変化とその要因である。収集した番号と学年を抽出した部分に付記した（例：3–2 は、収集番号 3 で、学年は 2 年生）。収集したデータ（英語学習史）を Dörnyei & Shoaib（2004）の研究における分析方法であるテンプレート・アプロ―チ（template approach）に沿ってまとめ

た。これは、あらかじめ研究課題に沿ってテンプレートを作成し、そこに実際のデータから当てはまる部分を入れ込むものである。本調査では、学習者のエンゲージメントを高めた経験を研究課題とするため、Mercer & Dörnyei（2020）の著書でまとめられているエンゲージメントを高めるための要素（表 2）をテンプレートにし、そこに実際のデータを入れ込んだ。

3.2.　エンゲージメントを高める要素

エンゲージメントを高めると考えられる要素は以下である。以下の要素は、*Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms*（Mercer & Dörnyei, 2020）から引用した。実際に学習者のストーリーを読み進める中で、追加の要素と考えられる要素については考察で記述した。

表 2　エンゲージメントを高めるための要素

学習者エンゲージメントを取り巻くもの

1	言語の社会文化的地位と社会資本としての価値
2	教室内の言語学習を教室外の人生経験に結びつける
3	貴重なリソースとしての家庭
4	学校目標（カリキュラム・テスト方針など）
5	学校全体の文化

学習者のマインドセットへの支援

1	有能感を上げる
2	成長マインドセットへの支援
3	学習者の当事者意識と自己規制への支援
4	問題解決への前向きな姿勢
5	粘り強さを育てる

教師と学習者の信頼関係

1	親しみやすさ（コーチのように考えて学習者と接する）
2	共感を示す
3	学習者の個性を尊重する
4	学習者の可能性を信じる
5	学習者の自律性を尊重する
6	教えることに情熱を持つ

ポジティブな教室力学と教室文化

1	手本を示して導く
2	集団意識を高める
3	学習者間の信頼・共感・受容を促進させる
4	協働と支え合いの文化を育む
5	問題・対立をそれぞれの立場を尊重し、建設的に解決する

タスク・エンゲージメントの喚起

1	学習者に合わせてデザインする
2	学習者を感情移入させる（驚きを喚起する内容を作る）
3	学習者の好奇心を高める（問いや謎を提供する）
4	タスクのセットアップに集中する
5	学習者を行動の担い手にする

タスク・エンゲージメントの維持

1	認知的不可を与える（受動的な学びから高度思考の学びに導く）
2	楽しさを増やし、退屈さを減らす
3	関心を引き付け、興味を喚起する
4	予測不能を利用する（解答の無い問いへの挑戦など）
5	達成目標を段階的に示す

（Mercer & Dörnyei, 2020 をもとに筆者作成）

3.3. 調査結果

3.3.1. 学習者エンゲージメントを取り巻くもの

（1）言語の社会文化的地位と社会資本

言語学習は、社会情勢や経済の動向の影響を受ける。ブリティッシュ・カウンシルは、イギリスの欧州連合離脱（ブレクジット）後に必要となる重要言語について、トップからスペイン語、中国語、フランス語、アラビア語、ドイツ語と発表した（Tinsley & Board, 2017）。それまで上位に入っていたロシア語、ポルトガル語、トルコ語は、政治や経済の状況の変化によって優先されなくなっている。日本では、グローバル社会へ向けて経済界からの要望もあり、英語の需要は常に高く早期英語教育の開始も始まっている。こうした社会言説が学習者に与える影響は少なくない。

学生の声

私は、英語教育は大事だと考える。主な理由は 2 つある。1 つは将来に役立つからである。英語を使うことができると世界で仕事をすることができたり、また世界中の人と知り合いになり自分の視野を広げることができる。2 つ目は海外旅行した時にとても充実な時間を送ることができる。私にこのような考え方を持つようになったきっかけは親や中・高時代の先生からの影響だと考える。(17-1) 私は英語に対して、世界中で話されている主流な言語というイメージがある。実際、地域によって多少の発音の違いはあるものの、世界人口の 21％が英語を実用レベルで話すことができる。つまり、英語を習得しさえすれば世界中の約 5 人に 1 人とコミュニケーションを取ることができるのだ。(36-1)

(2) 教室内での言語学習を教室外の言語学習を結びつける

インターネットの広がりにより、バーチャルな言語空間などで学習者が教室外で英語に触れる機会は増えた。教室外で英語に触れているとはいえ、それが教室内の言語学習と結びついていないこともある。教室内学習と教室外学習を結びつけるには、第二言語を用いて学校外の人々と交流をおこなう交流課題が有効である。

例（カナダ）：3 つのカテゴリー（クラスメート・大学・地域コミュニティー）と関わる「交流課題」を出した。結果は学生たちの課題へのエンゲージングが見られた。

交流課題では、社会奉仕プロジェクト（community-service project）（募金の実施・視覚障害者のための本の朗読・低学年児童への学習サポートなど）・第二言語話者の観光客へのオンライン・サービスなどもエンゲージメントに効果がある。日本では、地域貢献英語活動（鈴木・前田，2020）、コミュニティー通訳、などが例として挙げられる。

学生の声

高校2年生の時に参加した、オンラインのグローバル交流会で日本人を除くアジア系のティーンエイジャーたちが流暢に英語を話していて、とても影響を受けたとともに自分の英語力のなさを実感し、もっと英語を勉強しようと思うモチベーションに繋がった。今まで、日本国内にいると英語を使う機会はあまりなく、英語を勉強する具体的な目標がなかった為モチベーションがなかった。しかし、海外の人と接したことで大学では1年間留学にチャレンジしたいという気持ちが強くなり、今もモチベーションを維持できている。(42-1) 小学校の頃に参加した英語サマーキャンプです。同じ地区の小学5・6年生で集まり、ALTの先生方と2泊3日の間でキャンプをしました。キャンプの中で学校以上にALTとコミュニケーションをとることができて、みんなで英語劇を行いとても楽しかった記憶があります。ここでの楽しかったという思い出が影響し、英語塾に通うことに繋がり、学校が始まってからもALTとの会話が増えました。(45-1) 学校で開催された国際交流イベントを通して、アメリカ在住の学生と仲良くなり、Instagramやスナップチャットを通じて会話をするようになると、必然的に英語を学び、自分の気持ちを表現する必要が出てきたことから、英語力が向上し、それが良い効果となり、英語学習へ対するモチベーションも高まりました。(10-2)

(3) 学習者エンゲージメントのリソースである家庭

親や家庭の習慣や手本となる行動が、子どもの学習意欲の形成に決定的な役割を果たす。親の英語学習使用および学習に対する考え方が学習者のエンゲージメントに影響を及ぼす。

学生の声

私は英語学習に対して初めは、ただただ楽しいものだと思っていました。それは、私の母が幼い頃にたくさん洋画（ディズニーやピクサー）を見せていたり、英語の曲（ディズニーやビートルズ）を聴かせていたり、自ら好きで歌っていたりしたからです。また、父親の仕事の影響で幼稚園の頃に 2 年間シンガポールに住んでいて、その時に外国人の友達がたくさんできて、簡単な英語でコミュニケーションをとるのがとても楽しかったからです（1-1）

もともと両親が洋画や海外ドラマが好きで物心がつく前から NHK で放送されていた、「フルハウス」をよく見ていた。話の内容などは忘れていたが、自分にとっての英語学習の原点はここだと考える。5 歳ぐらいの時に、「ハイスクールミュージカル」を見たことで、幼いながらも海外に住みたいと考えるようになった。（29-1）

思い返してみると、私は幼いころから英語に興味を抱いていた。その理由は果たして何なのか考えたとき、両親の影響が大きいと感じる。私の父は英語の教師であり、小さいころから日本語を英語に言い換えて教えてくれていたし、私の母も、まだ言葉がよくわからない時から英語の絵本を買ってきて読み聞かせしてくれていた。そういった小さいころから英語に触れる機会を積み重ねてきたことで、自然と英語に興味を抱き、話せるようになりたいと思い始めたのだと思う。（37-1）

幼少期の海外経験はほぼ覚えていないが、家族から当時の話を聞くことで海外や英語への興味を持った。（43-1）

私は兄が英会話の家庭教師をつけていたことから物心がついてきた三才から十五才まで同じ英会話の家庭教師をつけていた。最初のほうは私が英語に嫌悪感をもたせず、さらにコミュニケーション能力をみにつけることに力を入れていたため歌を歌ったりゲームをしたりと子供が楽しく英語を学べるようなカリキュラムにしてもらっていた。そのことから私にとって英語は身近なものであり中学生の最初のほうまでは苦手意識もなく育った。（46-1）

英語と初めて出会ったのは2歳の時である。両親が、英語ができなくて後悔をした、という意見からインターナショナルスクールに通わせてくれていた。私はつまり、日本語よりも最初に英語を勉強していて、みんなとは少し違う、文法による勉強方法ではなく、体に染み付いた英語をみんなの学ぶ日本語のように勉強していた。(51-1)
私が英語に興味を持ったのは小学二年生頃でした。もともと母の影響もあり、英語の曲や映画を見ていたのもありますが、その時一番好きで関心があったものが海外のD lifeやDisney channelで放送されている子供向けのアニメでした。(54-1)
私の父親が英語を流暢に話せるので、父親が英語を話しているのを見た時にすごくかっこいいと思いました。私も英語を流暢に話してみたいと思い、英語に対してもっと学んでみたいと思えるようになりました。(14-1)
私は母に連れられて3歳の頃にディズニーの地元の英語イベントに参加して、ネイティブスピーカーの先生とお喋りできたのが嬉しかった、というのが私のはじめて英語にふれた経験です。親の教育方針としてどんな人種や国籍の人とも仲良くなれる人間に育ってほしい、ということから英語を喋るひとと関わりを持たせるために英語イベントに何度も連れて行ったそうです。(20-1)

(4) 学校での優先度、カリキュラム内容、テスト方針の影響

学校が、言語教育の社会的地位と価値向上のために学習者・保護者・社会に発信することで学習者の英語へのエンゲージメントが上がる。CLIL(Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習)を導入することで教育カリキュラムを改革すること、交流会などの言語関連のプロジェクト・「言語デー」のようなイベント開催・図書館に第二言語を用いた本・映画を充実させるなどがある。

学生の声

小学校三年生になったころ、学校で英語の授業が始まった。地域のボランティアの方が授業のサポートに来て、担任の先生と一緒に音楽や体を使ったアクティブな英会話メインの授業が行われた。学期間に何度か海外出身の先生が来て簡単な英会話をレクチャーしてくれたため、次第に英語は楽しいものとしての認識が強くなった。(7-3) 私は英語を話せるようになりたいという英語に対するあこがれの気持ちが強く、留学にもとても興味があったため、英語コースのある高校に進学した。そのコースはUniversal Learningコース、通称ULコースといって留学がカリキュラムに組み込まれていて、英語の学習に特化したコースだった。英語の授業も何種類かあって、ネイティブの先生による授業は全てオールイングリッシュで行われた。また英語の行事も豊富で、夏休みには3泊4日のオールイングリッシュで行うULキャンプや生徒自ら台本から作り上げる英語劇や国際問題について英語で議論するUL conferenceなどがあった。高1の初めのころは1月に留学が控えていたので、留学でたくさん学びたいという気持ちが英語学習のモチベーションになっていた。(53-1) 実際に私が経験した中で最も有効だと考えるのは、多読学習である。私の学校では、中学校3年間で100万語以上、高校3年間で300万語以上読むことを目標として設定された。本を自力で読み切る達成感が得られ、次の本も読もうというポジティブな気持ちを持ちやすい。(15-1)

(5) 学校全体の文化が学習エンゲージメントに与える影響

学校が、学習者のコミュニティー意識を育て、エンゲージメントを高める手段としては、教師の日々の授業におけるミクロレベルの介入以外にも教師の活動を支援すること、学習者がカリキュラム化されていない学校外の活動に参加することで、自己肯定感、幸福感を向上させ、学習への意欲も高まる。

学生の声

お昼休みにはカフェテリアで ALT の先生と一緒に食事をしながらおしゃべりをしました。複雑な文は話せませんでしたが、単語単語でも英語を話すことで自分の気持ちを伝えられるのだ、ということに感動し、英語学習へのモチベーションが高まったことを覚えています。（10-2） 私にとって英語を勉強する中で最も大きな出来事だったのは中学 3 年生の時に学校の教育カリキュラムの 1 つとして行ったオーストラリアへの留学です。この留学は英語を学習するという意識があまりなかった私の英語学習に大きな影響を与え、英語学習に変化を与えました。まずオーストラリアの小学生の学習に対する意識の高さに私は驚きました。日本では自分が当てられるまで積極的に発言をしない生徒の方が多いですが、オーストラリアの小学生たちは自分が発言したいのだという自己主張や自己表現をする姿が見受けられました。その姿は私にとって新鮮なことであり、向上心を持って学習することで身に付く力の大きさを知りました。（38-1）

3.3.2.　学習者の促進的マインドセット（有能感・成功体験）

自己決定理論（Deci & Ryan, 1985）、自己効力感理論（Bandura, 1977）、マインドセット理論（Dweck, 2006）などの心理学の理論を基に、学習者のエンゲージメントを支える「促進的マインドセット（facilitative mindset）」がある。促進的マインドセットを培うためには有能感（自分ならできる、という成功を信じる動機づけ）、と自律性が必要である。有能感を高めるためには、成功体験、教師の意識的な足場かけ、ロールモデルが必要である。学習者の自律性には、主体性、粘り強さ、セルフコントロールが求められる。

学生の声

中学 1, 2 年生の時に English Camp という行事がありました。1 泊 2 日の泊まり込みで英語学習を楽しく行うことをコンセプトに開催されるキャンプでは、基本的に英語しか話さず、英語を使ったゲームや班でスキットを作り、発表するというイベントがありました。スキット発表では、各クラスから代表の班を投票で募り、全生徒の前で発表するという流れになっていたのですが、私の班は見事代表班に選ばれ、緊張しながらも全生徒の前で英語のスキットを行うという成功体験を経験しました。この経験が私の英語学習に対するモチベーションの向上に繋がり、英語がより好きになり、もっと話せるようになりたいと思うようになりました。(5-3)

私が英語を大好きになったのには、「褒められた」という経験が大きく影響していると考えています。小学生の時に友達から「発音いいね」と褒められたこと、公文の先生から「発音いいのは分かっているから音読のテスト免除しよう」といわれたこと、中学校の英語のテストで 100 点をとったこと、英語の質問を友達からしてもらえるようになったこと、高校で海外の方に自分の英語が通用する場面があったこと、これらの他人からの評価の影響で私は英語のおもしろさや楽しさに気づけました。この、「他人からの評価」は他のことも同じだと思いますが、人から褒めてもらえることほどモチベーションをあげられるものはないと考えています。(32-1)

それは大学受験勉強を通して、スタディーサプリの神授業として一時期話題になった関正先生の授業を受講したためである。この先生は英語も教えてくれたが、何より大きな熱意で勉強の本当に伸びる学習法を教えてくれた。そしてモチベーションが下がっていた私が英検準一級に受かることができ、一つの成功体験として自信にもつながった。(33-1)

中学 3 年生の時、学年で行われたスピーチコンテストで 3 位を取ることができ、また英検 2 級にも合格した。結果がついてきたことでそれが英語のモチベーションにもつながった。(34-2)

今のモチベーションは留学と英語教員になるという目標である。教員になろうとしたきっかけは、高校生の時に部活動の先生が流暢に英語を話している姿に憧れたことと、英語ディベートをしたときに英語というツールを使って話すことが楽しいと思ったことである。そのため、留学を通して海外に触れることを経験したいと思った。(43-1)
日本語の手紙を元英語教員だった校長先生に翻訳してもらい、それを自分で書き直して送ったのですが、いつか私も校長先生のように英語で手紙を書けるようになりたいとその時思い、そこからさらに英語を学ぶ上でのモチベーションが高まったと感じます。その校長先生はそこからずっと私の中でロールモデルであり、英語で大変だと思うこと、難しいと感じることがあってもその校長先生のことを思い出すと自然とモチベーションが高まり、やる気が出ます。(54-1)

3.3.3. 教師の行動(コーチング)・教師と学習者の信頼関係

エンゲージメントへと導く教師の役割は大きい。教師は、学習者を受益者ではなく、学習の設計者であると考える。従来のティーチングとは異なるコーチングの考え方(マインドセット)が必要である。コーチングにおける教師の役割は、学習者には学習の責任があると考え、学習者と対話することで学習者は教師が学びをどのように支援してくれるか理解する、学習者が目標を立て、挑戦するように促す、学習者の自律的行動を重視する、学習者が考えるように質問をする、第二言語学習を促進するマインドセットの発達に焦点を当てる、である。学習者と学習観について話し合うこと、自身の学習経験を学習者と共有することも重要である。

学生の声

高校生でのアメリカ留学が中止となった際に、私の勉強意欲は低下してし

まったが、先生は私に寄り添って新しい目標ができるように相談に乗ってくれた。その時に見た、生徒を見捨てない先生たちの姿からもう一度英語の学習を頑張ろうと気持ちを戻す事ができた。加えて、週に1回行われる単語テストやスピーキングテストにおいて、的確なアドバイスやコメントをもらうことで、今の自分に足りないことは何かを明確にすることができ、「日々の学習の努力を見ていてくれる人がいる」と思えたことで英語への学習意欲を常に良い状態に保つ事ができたと考える。(39-1)
何より影響が大きかったのは、高校3年間の英語の先生だ。私の先生は、授業の効率もよく、わからないところを質問したら、すべてに対してわかりやすく解説してくれた。本当に理解することができた。その先生に出会い、英語に対して難しい・複雑という考えから、根を理解すれば思っているよりも簡単・親しみやすい、という考え方に変わった。(49-1)
私が今英語を大学で専攻している大きな理由は、高校で、ある一人の英語の先生と出会ったことです。その先生はとにかく厳しかったのですが、2年生の時担任を持ってもらった際に、進路のことについてとても親身になってくれました。そしてその先生は昔イギリスに留学なさっていたのですが、そのときの経験を話してくださいました。それは、それまでぼんやりとしかなかった外国のイメージがすこしはっきりした瞬間でした。(50-1)

3.3.4. ポジティブな教室力学と教室文化

学習者が教室内において英語で発信することに対して抱く不安は、教師の前よりもクラスメートを前にした時の方が強いという研究があることから、教室を安心できる環境にすることが重要である。自己決定論の要素の一つである、関係性の欲求（relatedness）は、教師と学習者、学習者同士の信頼関係が学習者集団全体の雰囲気とそこに生まれる文化を決定づけるものである。学習者間のT（trust）E（empathy）A（acceptance）信頼・共感・受容を高め、協働と支え合いの文化を育むことが重要である。

学生の声

教師という職業に興味を持ちました。英語の教師になりたいと考えたのは、高校で英語の授業がどの教科よりも一番面白いと思ったからです。高校の英語のクラスは二つあって、片方の授業がクラスメートや先生と直接英語を使って会話をしたり、毎週スピーチを行うクラスだったのでとても印象に残っています。（14-1） 英語に苦手意識を持ったまま高校生になった。私の高校では受験のための勉強だけでなくスピーキングに力を入れており、毎回の授業でスピーキングのペアワークがあった。それは、教科書の内容を英語で要約してお互い伝えるというものだった。中々うまく出来なかったが、先生が「文法は気にしないでとりあえずそれらしく話してみよう」と声をかけてくれた。この言葉によって英語に対する苦手意識は薄れ、少しずつ話せるようになった。また、英語を話す上で一番大切なことは、文法や単語のミスを恐れず伝えようとすることだということを学んだ。（28-1）

3.3.5.　タスク・エンゲージメントの喚起・維持

タスクは学習において重要であるが、そのデザインをするのは教師である。タスクは、自身が教える学習者のために作ること、学習者が感情移入するようなものにすること、好奇心を喚起するものにすること、学習者全員が参加できるように導くことが求められる。また、学習者のエンゲージメントを維持するために継続する学びをタスクの中に入れる必要がある。

学生の声

私は、中学校で基本的な英単語や英文法を学んでいく中で、楽しさを感じた。日々、英語に関して知らなかったことを知っていく。そして徐々に話せるようになっていく。これが私にとってとても面白かったのだ。ALT

の先生とも少しずつ会話ができるようになっていることを実感できた時はとてもうれしかった。英語が身についていく感覚を得る度に、私は英語学習の楽しさに惹かれていった。自分の成長が実感できたことは、英語学習へのモチベーションの変化に大きく関わっていると思った。そして、そのまま高校に上がり、英語に対する情熱を失うことはなく、むしろもっと楽しくなっていった。中学校の時は触れなかった細かい内容に触れ、どんどん理解が深まっていく面白さは今でも忘れられない。こうして、勉強をし続け、大学はもっと英語について学びたかったため国際英語学科を選んだ。そんな私は将来、高校の英語教師になりたいと思っている。理由は、英語の楽しさを教えたいというのと、ある程度専門性の高い深い内容を教えたいと思っているからだ。(52-1)

私の英語に対して考え方が変わったのは高校三年生でした。高校三年生の時に、英語の担任になった先生は長年教師をしている先生でした。その先生の授業スタイルはとても厳格でした。単語を調べる際は、電子辞書の使用が禁止されていました。辞書を引くことは慣れていないと時間がかかります。しかし、そのページに載っている単語にも目を通すことができました。今まで知らなかった単語をその際に覚えることができました。また、日本語訳に力を入れている先生でした。私は、個別で若草物語を翻訳してみるという課題をもらいました。短い文章だけでしたが、やりがいかありました。昔ながらの英語の使いまわしなどを調べて覚えることができました。この経験は、今まで興味がなかった文法をもっと学びたいと思うきっかけになりました。(3-2)

3.3.6. 追記の項目：言語そのものへの興味

母語とは異なる外国語を学習する動機づけとして、言語そのものへの興味が想定される。

学習する言語の語用、文法に最初の関心を持つ学習者もいる。そうした興味

が継続すれば、学習へのエンゲージメントも維持されるであろう。教師ができることとして、ストーリーの力を借りる方法がある（Mercer & Dörnyei, 2020）。教師がタスクなどで小説、ニュース、詩、歌、読み聞かせ、漫画、ドラマや映画、ゲーム、ダンス、劇などを入れ込むことで、学習者の言語への関心が深まり、エンゲージメントに繋がる可能性がある。

学生の声

小学生の頃、英語の綴りがかっこいいと感じて英語に興味を持った。その後、ALT の先生が英語を話している様子を見て英語が話せることへの強い憧れを持った。（55-2） リスニングを頑張ろうと「glee」の好きなエピソードを字幕なしで観るようにした。話の内容は知っているため、なんとなく聞き取れるフレーズが増えると嬉しかった。また、ドラマで使われた曲を英語の歌詞を見ながら聴くようになり、シーンなどから自分なりの解釈をしてみて、日本語訳と照らし合わせた時に合っているととても達成感がありモチベーションアップにもなった。学習方法は人それぞれだが、ドラマや映画、音楽から英語を学ぶのがモチベーションを保つこともでき、私には合っているのだと思う。（12-1）

5.　考察：英語学習におけるエンゲージメント

留学を必須とする学科に入学した学生であることから、英語学習に対するポジティブな姿勢を持ち、英語学習へのエンゲージメントを維持してきた結果として選択した進路であると予想はできた。英語は文化資産（cultural capital）になりうる（Bourdieu, 1977）という社会言説があることから、学習者の親は、資産になる英語力をつけてもらうために子供の早期英語教育を始める。回答者 55 人のうち 13 人は、小学校に入学する前から英会話教室に通い英語の勉強を始めている。幼少期からの英語学習は、学生の学習ストーリーからもわかるように、学習者のその後の英語学習へのエンゲージメ

ントを継続させる役割を果たしている。

学生のレポートには、教師への記述も多々あり、教師が学校の内外で、学習者のエンゲージメントを上げる、あるいは維持するために様々な工夫を凝らした学習活動を展開していることがわかった。特に言及したいことは、学生のストーリーから浮かび上がった、学び続ける教師をロールモデルとした例、英語の専門家としての教師への信頼、教師と学習者間のラポートである。

教師自らが学びを続けることで学習者のロールモデルになり、学習者に英語学習へのエンゲージメントの芽が生まれる。教師が学び続ける必要があることは、昔も今も同じであるが、特に、社会の在り方が劇的に変化すると予測される Society 5.0 時代は予測困難な時代であると想定されるため、教師に求められる教師像には、世界的なオンライン学習の推進、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善、学校と地域の連携、学校体験活動、チーム学校への対応などがある（大家・本田、2022）。学習者が、教師に対して専門家としての信頼を築き上げる中で、学習へのエンゲージメントが維持されることが伺えた。教える側は、教える語学についての言語的な知識をしっかりと身につけることが必要である。学生は以下のように記述している。

> 二点目は大学受験のときの予備校講師の姿をみてその熱意に触れた時である。前にも出てきたスタディーサプリの先生であるが、ただ暗記する授業ではなく英語の本質を教えてくれた先生だった。ネイティブがいちいち覚えないようなことは覚えさせず、そのネイティブが持つイメージを教えてくださった。これも生徒が感じる本物らしさの一つの正体であると思う。そしてやはり本物らしさは生徒の学習のモチベーションとなる。つまり、英語教育においてより生徒に本物らしさを教えるためには教師自身の研究の機会をより設けるべきであると思う。（33-1）

そして、学習者に寄り沿い、気持ちを理解することができる教師が学習者のエンゲージメント維持に繋がることがわかった。

学習者を教室の外と繋げる活動の重要性も浮かび上がってきた。日本の場合、教室外で英語を使用する機会が限定されてしまうため、そうした活動は難しいと予測されるが、学習者のストーリーには様々な可能性が記述されていた。海外への短期・長期留学あるいは語学研修に 55 人中 22 人が参加している。約半数の学生は、大学に入学するまでに海外経験をしている。大学入学前に、海外経験によって培われた英語学習へのエンゲージメントを持っており、大学に入学後、それを継続できるように国際英語学科を選択したと考えられる。大学では、高校までの経験をさらに膨らませるような長期的な留学や海外の大学との交流、国内における英語を使う活動、英語をさらに専門的に深く学ぶ学習が求められるであろう。

学習者のストーリーを読まなければ見えてこなかったことがあった。特に、学習者が英語学習へのエンゲージメントを高めていく過程においてどのような感情を持つのか理解することができた。学習者が授業を「楽しい」と感じること、英語を使用することへの「憧れ」の気持ち、自分の英語が相手に通じた時の「喜び」、英語が不十分であるために意思疎通ができなかった「悔しい思い」を跳ね返し（レジリアンス）、挑戦しようという気持ちを持つことで、英語学習へのエンゲージメントは継続できるであろう。エンゲージメント強化を授業の中でどのように維持するかについては、ポジティブな感情を持つこと、教育のパートナーとして学習者に権限を委譲すること、学習活動への積極的参加があげられる（Mercer & Dörnyei, 2020）。これらに関して、学生のストーリーからは、特に、ポジティブな感情をもつことと学習への積極的参加が読み取れた。

エンゲージメントの強化には自律性が必要であるが、学習者が「教育や学習のプロセスに参加し、意思決定や考えを表明する権利を持ち、受ける教育を共にデザインするパートナーとして扱われること」（Mercer & Dörnyei, 2020）は、学習者のストーリーでは、自分の英語学習のために海外に行くという選択をすること、様々な授業外学習活動に積極的に参加すること、例えば多読学習のように、定期的に英語を読み、その量を自分の采配で増やし

ていくような活動の中で育まれていくであろう。そして、教える側は、「学習者が夢中になって取り組める言語学習経験をデザインすることで学習者を学びにエンゲージさせること」（Mercer & Dörnyei, 2020）を実践していくことが求められるであろう。教師は、学習経験のデザイナー（designers of learning experiences）（Mercer & Dörnyei, 2020）となり、学習者がエンゲージできる学習経験を作りあげることが重要である。

入試や検定試験を英語学習の動機づけとしてエンゲージメントを維持した例は学習者のストーリーの中でも数点観察された。こうしたテストは、ある一定の期間に学習者のエンゲージメントを高めることは可能であるが、目的を達成した後にそれが低下することがある。テスト準備のための授業では、教師中心の授業になり、学習の内容もテストに合わせて限定されてしまう可能性がある。テストのために教える授業では、授業の焦点が、テストの結果になり、内容の習得ではなくなるため、学習者と教える側のエンゲージメントが継続しないことが予想される。受験やテストは、それを超えたところにある別の目標への通過点であると考えた方がよいであろう。以下の学習者のストーリーでは、英語そのものへの興味と達成目標が、テスト勉強というステージに行く前に構築されている。

> 英検を受けるようになり、英語学習を楽しむだけでなく、目標を定めて勉強し始めるようになる。そして、中学生になると、定期試験が始まり、英語のテストで高得点を取れた時は英語をもっと学びたい、使えるようになりたいという気持ちになった。高校では、好きだった英語の授業も難しく感じて、英語学習へのモチベーションが下がってしまったときもあった。しかし、英語の好きな気持ちを忘れずに持って、将来英語を話せるようになるという目標を持って、受験も最後まで乗り越えることが出来た。このモチベーションは、英語が好きという気持ちからきている。その気持ちを芽生えさせてくれたのは、英語学習は楽しいと教えてくれた ALT の先生、塾の先生、中学校の先生たちのおかげである。（4-2）

6. まとめ

本稿は、*Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms*（Mercer & Dörnyei, 2020）を基に学習者のストーリーを使い、日本の英語学習者のエンゲージメントへの道乗りを追った試行的調査であるが、エンゲージメントは英語学習者だけでなく外国語を学習するすべての学習者に当てはまる概念である。英語が国際語としての英語（global English）としての位置を保つ現在では、第二言語学習の動機づけ研究の 7 割は英語を目標言語とした学習環境で行われている（西田、2022）。しかし、加速化するグローバル社会は、多言語社会に向かっており、欧米では、多言語教育に焦点を当てた研究が少しずつではあるが増えてきている。西田（2022）は、著書の中で Ushioda（2017）の研究を引用し、以下のように記している。

> Usioda（2017）によれば、Graddol（2006）の視点を挙げて、外国語の学習者が 21 世紀の後半には減少していく可能性があると指摘しています。今後は、英語学習を初等教育から開始し、中等教育ではコンテントベースや CLIL が行われ、大学レベルでは授業を英語で受講することになるでしょう。子供たちは、リテラシーや数学、情報やコミュニケーションと同様に基本的な技能として英語を習得していくだろうと言及しています。さらに Graddol は、英語が外国語ではなく、基本的な技能となり、英語は世界中の労働市場で共通語として使用され、バイリンガル話者は多言語使用話者との競争に敗れる可能性があるとも指摘しています。（西田、2022, p. 46）

今後は、動機づけ、およびエンゲージメントに関する研究では、こうした流れを受け、多言語話者としての学習者研究が増えてくることが予想される。

第二言語習得の動機づけ研究にエンゲージメントという概念を使うことについては、学びの形や社会情勢が変化する中で、動機づけを持つ学習者もその動機づけを阻害されることもあり、動機づけに加えて学習に従事する意志と活動を実施するには追加の概念が求められる状況下における提案であるこ

とが理解された。積極的な学習者のエンゲージメントは、「学校環境」「言語学習」「シラバスデザインおよび教材」「学習タスクとそのデザイン」「学習者仲間の関係」「教師との関係」（西田、2022）に加えて、「家庭環境」「授業外活動」「学習対象（言語・異文化）への関心」から生まれることがわかった。今後は、エンゲージメントの具体的な例をアクション・リサーチなどで実際に教育的介入をおこなう研究により、エンゲージメントの概念をより明確に示すことができるであろう。

今回の試行的調査では、学習者のストーリーを集める質的研究の手法を使った。第二言語習得研究分野では、量的研究が多く（60.65%）、混合研究（27.38%）、質的研究（11.57%）と続く（西田、2022）。質的研究は、データ量が多く、論文の頁数が多くなる、データの分析方法が多岐に渡る、という課題はあるが、実際の学習者の声を聴きそこから得るものは大きい。特に、第二言語習得あるいは応用言語学の研究者は、実際に言語教育を担う教師・研究者である場合が多いことから、学習者の声を聴くことは教育・研究の面で価値のある研究方法である。今後、そうした研究が増えていくことを期待したい。学習者のストーリーおよび学習史のデータ収集方法としては、「私の学習史」（My Language Learning History）を学習者に書いてもらう方法、インタビューをしてその結果をまとめる方法があるが、ビジュアル・データを取集する方法（Suzuki & Childs, 2016, 松﨑・鈴木・水戸、2019）など、新しいデータ収集方法により学習者の内面をより深く知ることで学習者の学びを深めていく学習デザインができるであろう。

参考文献

Bandura, A.（1997）. *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: Freeman.

Benson, P., & Nunan, D.（Eds.）.（2004）. *Learners' Stories*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

Bourdieu, P.（1977）. The economics of linguistic exchange. *Social Science Information*, *16*（6）, 645–668.

Casanave, C. P., and Schecter, S. R.（1997）. *On Becoming a Language Educator: Personal Essays on Professional Development*, N.J. LEA: Lawrence Erhaum Associations.

Deci, E. L., & Ryan, R. M.（1985）. *Intrinsic motivation and self-Determination in hu-*

man behavior. Plenum.
Dörnyei, Z.（2001）. *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge University Press.
Dörnyei, Z. and Schoaib, A.（2004）. Affect in lifelong learning: Exploring L2 motivation as a dynamic process. In Benson, P., & Nunan, D.（Eds.）.（2004）. *Learners' stories*（pp. 22–41）. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
Dörnyei, Z.（2005）. *The psychology of the language learner: individual differences in second language acquisition.* Lawrence Erlbaum Association.
Dornyei（2010）. Where do psychology and second language acquisition research connect? In Murphy, R. S.（2010）（Ed.）*The Language Teacher*, 34.2 March/April, 2010, Readers' Forum, 19–23.
Dörnyei, Z. & Ottó, I.（1998）. Motivation in action: A process model of L2 motivation. *Working papers in Applied Linguistics*, *4*, 43–69.
Dweck, C. S.（2006）. *Mindset*. New York: Ballantime.
Gardner, R. C.（1985）. *Social psychology and second language learning*: *The role of attitudes and motivation*. London: Arnold.
Graddol, D.（2006）. *English next: Why Global English may mean the end of 'English as a foreign language'*. British Council.
Kikuchi, K.（2013）. Demotivation in the Japanese EFL contexts. In M. T. Apple, D. D. Silva, & T. Fellner（Eds.）, *Language learning motivation in Japan*（pp. 206–224）. Multilingual Matters.
MacIntyre, P. D., Mackinnon, S. P., & Clement, R.（2009）. The baby the bathwater and the future of language learning motivation research, In Z. Dörnyei, & E. Ushioda（Eds.）, Motivation, language identity and the L2 self（pp. 43–65）. Multilingual Matters.
Mercer, S. & Dörnyei, Z.（2020）. *Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms.* Cambridge: Cambridge University Press.
Murkus, H. R., & Nurius, P.（1986）. Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954–969.
Shoaib, A. & Dörnyei, Z.（2004）. Affect in lifelong learning: Exploring L2 motivation as a dynamic process. In Benson, P., & Nunan, D.（Eds.）.（2004）. *Learners' stories*. pp. 22–41. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
Suzuki, S. & Childs, M.（2016）Drawings reveal the beliefs of Japanese university students. In C. Gkonou, D. Tatzl & S. Mercer（Eds.）, *New direction in language learning psychology*（pp. 159–183）, Switzerland: Springer International.
Tinsley, T. & Board, K. (2017) L*anguages for the Future*. London: British Council.
Ushioda, E.（2017）. Motivating learners to speak as themselves. In G. Murray, X. Gao and T. Lamb（eds.）, *Identity*, *Motivation and Autonomy in Language Learning*, pp. 11–24. Bristol: Multilingual Matters.
大家まゆみ・本田伊克（編）（2022）『これからの教職論』ナカニシヤ出版.
鈴木栄・前田隆子 （2020）.「地域連携と小学校の英語教育：学ぶから教えるへ」教職・学芸員課程研究．2. 53–70.
西田恵理子（編）（2022）『動機づけ研究に基づく英語指導』大修館書店.
松﨑真日，鈴木栄，水戸貴久 （2019）.「外国語学習者の絵が伝えること―ビジュアル・ナラティブによる試行的研究」福岡大学人文論集第 51 巻第 1 号．2. 3–24.

キーワード
英語学習、動機づけ、エンゲージメント、学習者のストーリー